

金城学院大学大学院
文学研究科論集

6

- 『義経記』における義経像の一貫性
——巻第六のもつ意味…………… 田 澤 亜矢子 (一)
- 〈翻刻〉大谷大学植丘文庫蔵『夢中秘記』について… 筒 井 早 苗 (一七)
- 『判書』の〈女〉…………… 高 田 育 子 (三五)
- 現代社会における「文化」の一視角
——ビエール・ブルデューの文化的再生理論… 北 澤 尚 子 (六二)
- 介護保険法をめぐるボランティア団体の動向
——特定非営利活動促進法との関連において… 矢 島 洋 子 (八二)
- 言語獲得における数量詞解釈…………… 柴 田 真 季 (一〇四)
- 『オリヴァー・トウィスト』にみるディケンズの育点:
結婚ナンシーの人物造型に関する二つの意見… 武 藤 英代子 (一一六)
- ワーズワスの祈り—『不滅のオード』再考…………… 小 林 七 実 (一三〇)

2000年3月

金城学院大学大学院文学研究科

『オリヴァー・トゥイスト』にみるディケンズの盲点：

娼婦ナンシーの人物造型に関する二つの意見

武藤美代子

はじめに

チャールズ・ディケンズの第二の長編小説『オリヴァー・トゥイスト』の従来解釈は、その副題“*The parish Boy's progress*”が示す通り、孤児である主人公オリヴァーの遍歴物語とするのが一般的である。オリヴァーは救貧院で生まれ育ち、その後サワベリー葬儀屋の奉公から逃げ出し、ロンドンのフェイギン盗賊団の手に落ち、義兄モンクスの企みによって幼い命の危機に瀕するが、最終的にはブラウンロー氏やローズ・メイリー達の住む善の世界に辿り着くことができる。グレアム・グリーンはこの『オリヴァー・トゥイスト』の世界について、“...is it too fantastic to imagine that in this novel, as in many of his later books, creeps in, unrecognized by the author, the eternal explanation of our plight, how the world was made by Satan and not by God, lulling us with the music of despair?” (Greene 101-110)と述べているが、まさしくここには彼の言うマニ教的二元論の明暗の世界がみごとに描かれている。まず、明暗の暗の世界とは、バンブルや白ジャケットの紳士に代表される救貧院であり、そして、フェイギンやサイクスに代表されるフェイギン盗賊団の悪の世界を意味する。明の世界とは、ブラウンロー氏やローズ・メイリーに代表される慈愛に満ちた善の世界を意味する。

しかし、オリヴァーがフェイギン盗賊団の悪の世界から、ブラウンロー氏やローズ・メイリー達の善の世界へ辿り着くことができたのは、フェイギン盗賊団の一味娼婦ナンシーの存在無くしては有り得なかったのである。ナンシーが、命がけでオリヴァーの救出を

ブラウンロー氏やローズ・メイリー達に願い出、それに必要な情報を与えたお陰でオリヴァーは地獄のような世界から天国のような世界へ辿り着くことができたのである。このナンシーに対する解釈は、当時ヴィクトリア朝時代においても現代においても、肯定的なものとの否定的なものとの二分している。従って、本論においてはその二分するナンシーに対する解釈を中心に検証し、そこからナンシー創造におけるディケンズの意図とその結果を考察する。

1 ディケンズのリアリズム宣言

ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』の序文において、“...to show them as they really are. ... it appeared to me that to do this, would be to attempt a something which was greatly needed, and which would be a service to society” (*Oliver Twist* 4)と、作品の登場人物達を「現実から切りとったようにあるがままに描き」そしてそれがディケンズにとって「必然的なことであり、ひいては社会のためでもある」と言明している。このことから、この作品を書く時のディケンズの最大の関心事が、いかに作品に“reality”をもたせることにあったかということを知ることができる。そして、ナンシーに関しても次のように述べている。

It is useless to discuss whether the conduct and character of the girl seems natural or unnatural, probable or improbable, right or wrong. IT IS TRUE.

Every man who has watched these melancholy shades of life know it be so.

Suggested to my mind long ago—long before I dealt in fiction—by what I often

saw and read of, in actual life around me, I have for years, tracked it through

many profligate and noisome ways, and found it and found it still the same.

(*Oliver Twist* 6; 下線筆者)

ディケンズの創造したナンシーは自分の勝手な空想から作りあげた人物ではなく、事実のなかから必然的に産まれた存在だということを力説している。

また、ディケンズの親友でもあり、また彼の権威的な伝記作家でもあるジョン・フォスターが、“...his indifference to any praise of his performances on the merely literary side, compared with the higher recognition of them as bits of actual life, with the meaning and purpose on their part, and the responsibility on his, of realities rather than creatures of fancy” (Forster I: 70)と、ディケンズの“reality”の宣言に説得性を与える言葉を述べている。この言葉はまさに、作家として第1歩を踏み出したばかりのディケンズにとっての最大の関心事が、事実をありのままに描くリアリストとしての鋭い観察眼によって作品を書くことにあったと言うことを裏づけている。さらに、ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』を書き始めた段階で、フォスターへの手紙において、“I hope to do great things with Nancy. If I can only work out the idea I have formed of her, and of the female who is to contrast with her” (“Letters” 66)と述べていることから、ディケンズが娼婦ナンシーをこの作品において単なる添え物ではなく、重要な人物として描こうとしていたことが窺える。

ディケンズと娼婦との関わりにおいて、ディケンズが長年携わっていた慈善活動の一環で、1847年に開設されたユレイニア・コテッジという娼婦更正施設を見ることができる。(P. Collins 98-110)¹。この「淪落の女性たちの家」の開設準備から、企画、運営管理、監督者達の管理、収容者達の教育カリキュラム、そして、彼女達の更正後の社会復帰に至るまで、所有者のクーツ女史 (Angela Burdett Coutts, 1814-1906)に代わって、実質上の運営管理はすべてディケンズが行っていた。これに関してフィリップ・コリンズが、“This is the only charitable activity and institution to which he gave his consistent attention over a prolonged period (some ten or twelve years)” (P. Collins 100)と述べていることから、ディケンズがいかに娼婦達の更正に情熱をもって全力を注ぎ、彼女

達の社会復帰の問題に真剣に取り組んでいたかを伺い知ることができる。実際、そのうちの何人かは幸福な結婚をしたり、あるいは、オーストラリアで新しい生活を始めることができたものも少なくない(P. Collins 110)。このように、この長い期間ディケンズは淪落の女性たちの生活に直接的に携わってきたのである。

2 ナンシーについて二分する解釈

この娼婦達の生活を真近に見てきたディケンズが創りだしたナンシーについて同時代の作家サッカレーは次のように述べている：“Bah! What figments these novelists tell us! Boz, who knows life well, knows that his Miss Nancy is the most unreal fantastical personage possible; no more like a thief's mistress than one of Gesner's shepherdesses resembles a real country wench” (Thackeray 207-8)。ナンシーは全く非現実的で実在する人物とは程遠く、ディケンズの空想によって創り出されたに過ぎないと、サッカレーは鋭く非難する。これは全くディケンズの意図に反した指摘となる。しかし、同じくディケンズと同時代のウイスキー・コリンズは、“The character of ‘Nancy’ is the finest thing he ever did. He never afterwards saw all sides of a woman's character—saw all round her” (Wilson 98)とナンシーを絶賛し、まさしく、ナンシーを完璧な女性像だとしているのである。コリンズはフォスターと同じくディケンズの親友の1人であり、ディケンズのことを公私ともに良く知っている人物である。そしてもちろん、ユレイニア・コテッジの慈善活動等を通して、ディケンズがナンシーのような種類の女性たち、すなわち、淪落の女性達の生活を良く知っていることも承知していた。従って、上記ウイスキー・コリンズの「ナンシーは完璧な女性である」という言葉はナンシーがこういうディケンズの実生活の経験から創造された人物であり、現実味を帯びていると確信しているのであろうか。

現代の批評においても、ナンシーに対する見方は二分している。 アンガス・ウイルソ

ンは、“The Prostitutes of his novels are merely Magdalen models,...and even among the glamorous, gamey, stinking set of petty thieves and brutal robbers a key character, the prostitute Nancy, who, to my thinking, has only the shadowiest existence” (A. Wilson 98, 129)と述べ、ディケンズはナンシーを美化し、聖女に偶像化しているに過ぎないとその非現実性を厳しく指摘している。しかし、ナンシーはマグダラのマリア²ではない。何故ならば、彼女は列聖されても娼婦のままであるし、聖母マリアの対照的存在とはなり得ないのであるから。且つ、ローズ・メイリーはヴァージン・メアリーとして描かれてはいない。従って、ウイilsonの指摘するナンシーは「マグダラのマリア」で「影の薄い存在」であるとする根拠は薄いものと思われる。

一方、もう1人の現代の批評家マイケル・スレーターはナンシーについて次のように述べている。

her [i.e., Nancy] pathetic loyalty to Sikes, the only object that her sordid and brutal world gives her to love ... leads directly to her murder and brings her closer to true tragic status than any other of Dickens's heroines. ... Lady Dedlock is too shadowy a figure in comparison though she perhaps comes nearest Nancy in this kind (essentially a Shakespearean kind) of tragedy...
(Slater 75)

スレーターは泥棒の一味で惨めな街の娼婦でしかないナンシーを、シェイクスピア的な悲劇的なヒロインにまで高めているのである。また、ナンシーがシェイクスピア的な悲劇的なヒロインであるということに関して、ローレンス・セネリックがナンシー殺害の場面における、サイクス、ナンシー、フェイギンとを、オセロ、デズデモーナ、イアゴとの関連で、比較・検証し、ナンシーはまさしくデズデモーナであるとしているのも注目に値する (Senelick 97-102)。アンガス・ウイilsonが、「ナンシーはマグダラのマリアに過ぎな

い」と指摘する場面は、マイケル・スレーターが、シェイクスピア的な悲劇的ヒロインであるとする場面と同じく、ナンシーがサイクスに殺される場面である。

She staggered and fell: nearly blinded with the blood that rained down from
a
deep gash in her forehead; but raising herself, with difficulty, on her knees,
drew from her bosom a white handkerchief—Rose Maylie's own—and holding
it up, in her folded hands, as high towards, Heaven as her feeble strength
would allow, breathed one prayer for mercy to her Maker. (*Oliver Twist*
317)

しかし、この場面はこの作品のクライマックスであり、この場面を境に悪人達は次々に転落して行き、サイクスは逃亡中に転落死し、悪の権化フェイギンは処刑され、物語は一転明暗の暗の世界から明の世界へと向かうのである。そしてオリヴァーもこれによって、暗の世界から明の世界へと導かれて行くことになる。従って、ナンシーは明と暗の世界のブリッジ・パースン（橋渡し）であり、つまり、明と暗の世界を繋ぐ存在であると同時に、逆に両方の世界から引き裂かれる存在でもある。

3 ナンシーの表象

そしてさらに、ディケンズはナンシーに当時女性の最高の美德とされていた母性をも賦与した。ナンシーはフェイギンに命令されるがままに、一旦はオリヴァーを連れ戻して来たのであるが、オリヴァーがフェイギンに折檻されるのを見るに絶えず咄嗟にオリヴァーを、“I won't stand by and see it done, Fagin,” cried the girl. “You've got the boy, and what more would you have? Let him be—let him be, or I shall put that mark on

some of you, that will bring me to the gallows before my time” (*Oliver Twist* 115)と庇うのである。ナンシーは、幼いオリヴァーをまるで我が子のように、自分の命と引き換えにしてまでも悪魔フェイギンから守ろうとしている。これは何故なのか？ マイケル・スレーターはナンシーのこの咄嗟の行動について、ディケンズの主要なテーマの一つである過去の記憶のテーマによって、“Nancy suddenly sees in Oliver the image of her own past self and pities it” (Slater 75) と説明している。

しかし、この自分の命をも厭わない自己犠牲的な行動は単なる改悛の情というよりは、まさしく女性が本能的に我が子や夫を危険から守ろうとする母性的な愛、慈愛だと考えることができる。19世紀においては、母性は女性の最高の美德として尊ばれ、女性が本来備えているものとして考えられていた。従って、未婚でしかも子供もいないナンシーにも女性本来の母性は当然あり、目の前で折檻を受けている幼子を見て、本能的に子供を庇う母性本能が目覚めたと考えられる。ナンシーが、オリヴァーの義兄モンクスの企みを知りオリヴァーの身の危険を察し「異常な苦悩」(*Oliver Twist* 147)の末に、ローズ・メイリーに会見しオリヴァーの救出を願い出た時に、ナンシーには確かに母性が現れていたのである。“The girl’s life had been squandered in the streets, and among the most noisome of the stews and dens of London, but there was something of the woman’s original nature left in her still” (*Oliver Twist* 266) と確実に、彼女の心の中にはまだ女の本姓の何かが残っていたのである。フレッド・カプランは、編纂したテキストへの注で、この「女の本姓の何か」について、“Dickens believed in the doctrine of the moral sentiments; that human beings are born with moral inclinations and that women especially have a natural inborn propensity toward goodness” (*Oliver Twist* 266; 下線筆者)と説明を加えている。ナンシーは確かに善人である。しかし繰り返しになるが、単なる善人以上のオリヴァーに対する自分の命も厭わない自己犠牲的な愛、すなわち、母性をそこに伺うことができる。

ディケンズは、ナンシーをオリヴァーの実質的な母親として、つまり、オリヴァーの実

の母親はオリヴァーを産むとすぐに亡くなり、最終的に、ローズ・メイリーの手に委ねられるまでは、ナンシーがオリヴァーをその自己犠牲的な愛によって、必死に守り続けたその姿のなかに、母性を描こうとしてた。さらに、どうしようもない生まれつき悪人のような情夫、つまり夫への献身的な愛をもその中に描こうとしていた。それは売春宿や牢獄などの汚辱にまみれた犯罪世界でこそ、慈愛や赦しの意味がたち現れることを伝えたかったからである。

結び

ジョン・ケアリーが作品の創造におけるディケンズの精神の特徴について、“It is a leading characteristic of Dickens’ mind that he is able to see almost everything from two opposed points of view” (Carey 15)と述べているが、これはまさに的確にディケンズの特徴を言い表している。すなわち、ディケンズは一つのを2つの相対する視点からみることができ、また逆に、2つの相対するものをひとつにしてそこから真実を見出そうとするのである。従って、ディケンズはこの彼の特性によって淪落の女性ナンシーを通して、女性の最高の美德とされる母性を描こうと試みたのである。しかし最終的には、ディケンズは母性を表象しきれなかった。フェイギン盗賊団の中であって悲惨な生活を送ってきたナンシーを通して、真実の愛を描こうと試みたのであるが、描ききることができなかったのである。ゆえにその結末として、彼女に死を与えたのである。

ディケンズは母性の表象が希薄である作家として言われている。ディケンズの作品における母親は、Clara Copperfield (*David Copperfield*におけるDavidの母親)やLady Dedlock (*Bleak House*におけるEstherの母親)のように、責任を放棄する母親、つまり、母親失格者、あるいは、Agnes Fleming (*Oliver Twist*におけるOliverの母親)やFanny Dombey (*Dombey and Son*におけるPaulとFlorenceの母親)のように、作品

の初めで早々に死んでしまう母親、そして、その他のほとんどの作品では、母親は最初からいないのである。また、主人公の母親ではないけれども母親的な存在であり、その中にディケンズ自身の母親の投影が見られるミコーバー夫人 (*David Copperfield* で学校を始めるが失敗するところなど) や、ディケンズの作品のなかで一番母親的である *David Copperfield* におけるベッチー・トロットウッドのような二次的な母親、そして、*Nicholas Nickleby* におけるニクルビー夫人のような母性のパロディー的存在のな母親もいるのだけれども、完全な母親は描かれていないのである。つまり、代理母的母親しか描かれていないのである。例えば、アダム・ビードのポイザー夫人のような存在の母親はディケンズの作品において見出すことはできない。つまり、ディケンズの作品は母親不在の小説なのである。結局、ディケンズは母性がわかっていなかったのである。そして、彼の作品のなかで、母性に対する盲点が典型的に表れているのが『オリヴァー・トゥイスト』である。ゆえに、そのことがナンシーに関して二分する解釈を生むのである。ディケンズは母性を表象したくても、表象することができなかったのである。

注

※本論は、日本英文学会中部支部第 51 回大会 (1999 年 10 月 23 日、富山大学) における口頭発表に、加筆・修正を加えたものである。

1. ディケンズは「ハウスホールド・ワーズ」において、ユレイニア・コテッジの広告文を匿名で載せている。

Dickens, Charles. "Home for Homeless Women," *Household Words, a Weekly Journal, 1850-1859*, (23 Apr. 1853): 161-175.

2. MARK 16: 9 は "Now when *He* rose early on the first *day* of the week, *He* appeared first to Mary Magdalene, out of whom *He* had cast seven demons." となっ

ており、LUKE 8: 2 では “And certain women who had been healed of evil spirits and infirmities—Mary called Magdalene, out of whom had come seven demons.” となっている。

Works Cited

- Carey, John. *The Violent Effigy: A Study of Dickens' Imagination*. London: Faber & Faber, 1973.
- Collins, Philip A. W. *Dickens and Crime*. London: The Macmillan press, 1962.
Rpt. New York: St.Martin's Press, 1994.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist; or The Parish Boy's Progress*, Ed. Fred Kaplan.
New York: W. W. Norton, 1993.
- ... *The Letters of Charles Dickens*, vols. 1 (1820-39) Eds. Madeline House and Graham Storey. Oxford: The Clarendon Press, 1965.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens 1824-74*, 3 vols, Ed. A. J. Hoppe.
London: Dent, 1966.
- Greene, Graham. *The Lost Childhood and Other Essays*. Harmondsworth: Penguin Books, 1951: 101-110.
- Senelick, Laurence. "The Traces of *Othello* in *Oliver Twist*," *Dickensian* 70 (May 1974): 97-102.
- Slater, Michael. "On Reading *Oliver Twist*," *Dickensian* 70 (1974): 71-81.
- Thackeray, William M. *Sketches and Travels in London*. Guernsey: Alan Sutton, 1989.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.